

高等学校 芸術科(音楽) 学習指導案

指導者 増井 知世子

- 日時** 平成 29 年 10 月 14 日(土) 第 2 限 10:35~11:25
- 場所** 第 1・第 2 音楽室
- 学年・組** 高等学校 I 年音楽選択クラス ア組 57 人 (男子 26 人 女子 31 人)
- 題材** 混声合唱を楽しむ
松下 耕作曲 『混声合唱のためのア・カペラエチュード』より
「光が」(工藤直子 作詞)「ゆきがとける」(まど・みちお 作詞)
- 目標**
1. 合唱活動に意欲的に取り組む。(関心・意欲・態度)
 2. アンサンブルに必要な知識を獲得する。(感受・表現の工夫)
 3. グループ合唱の発表を、アンサンブルの観点から分析的に聴く。
(鑑賞の能力)
 4. 自分のグループの合唱を、自己評価・相互評価を通して高める。(表現の能力)

指導計画 (全 7 時間)

- 第一次 教材楽曲の音取りとアンサンブルに必要な知識の理解 (クラス全体の活動)
2 時間
- 第二次 グループ合唱の練習 2 時間
- 第三次 グループ合唱の発表と相互評価・まとめ 3 時間 (本時 2/3)

授業について

合唱をつくりあげていく段階には大きく 2 つの段階があると授業者は考える。1 つ目は個人の音取り (1 人 1 人が音程やリズムを正確に歌うこと) の段階, 2 つ目はアンサンブルを整えて仕上げていく段階である。

2 つ目の、アンサンブルを整えるとは、各パートの音程やリズムや音色をそろえること、合唱した時のパートバランスをとること、強弱の変化をつけること、歌詞が聴き手に伝わるように言葉を歌うことなどである。本題材である「混声合唱を楽しむ」は、アンサンブルを意識した合唱活動を通して、合唱の深い楽しみを生徒に味わわせることが最終的なねらいである。

本授業クラスでは、1 学期に 2 曲の合唱曲に取り組んだ。歌うことに意欲的で声もよく出るが、互いに聴き合いながら歌うことがまだできていない。今回グループ合唱に取り組むことを通して、相互に聴き合って歌うことや評価し合う力を身につけさせたい。

第一次では、クラス全体で楽曲の音取りやアンサンブルを整えていくための方法についてクラス全体で学習する。第二次ではグループ練習を行う。第三次の前半ではグループ合唱の発表、後半では発表時の相互評価をふまえた洗練・再発表を考えている。

教材である『混声合唱のためのア・カペラエチュード』からの第 1 曲「光が」はカノンである。各声部が互いのメロディに呼応して歌うことを重視したい。第 2 曲「ゆきがとける」は、言葉の響きや 4 声のハーモニーと転調感を大切に歌わせたい。

題 目 能動的な合唱活動の取り組み ～グループ合唱を通して～

本時の目標

1. グループ合唱の発表を、アンサンブルの観点から分析的に聴く。(鑑賞の能力)
2. 自分のグループの合唱を、自己評価・相互評価を通して高める。(表現の能力)

本時の評価規準（観点／方法）

1. グループ合唱の発表を、アンサンブルの観点から分析的に聴いている。
(鑑賞の能力／意見発表・ワークシート)
2. 自分のグループの合唱を、自己評価・相互評価を通して高めている。
(表現の能力／次時の発表)

本時の学習指導過程

学習内容	学習活動	指導上の留意点
<導入> ・体操, 発声 ・全体合唱	・全体で軽い体操と発声をする。 ・全体合唱で、アンサンブルの観点からの留意点を再確認する。	・歌うための気持ちと体勢を整える。 ・本時に発表のグループには特にそのための個別の練習時間は与えられないため、全体合唱の中で十分にウォーミングアップさせるようにする。
<展開> ・2～3 グループによる合唱発表 ・再発表のためのグループ別練習・洗練	・2～3 のグループは合唱発表をする。他のグループはワークシートに気づきを記入し、意見を発表する。 ・グループに分かれて洗練のための練習をする。	・アンサンブルの観点に基づいて評価させる。 ・練習とまとめの時間設定を行う。
<まとめ> ・本時の成果の確認	・本時のまとめをワークシートに記入する。	・ワークシートを回収する。
備考 <準備物>楽譜, ワークシート		

＜グループ合唱の取り組み＞ 10月14日 中間発表

I年 組 番 名前

グループ (○で囲む) A B C D

＜発表と評価の手順＞

- (1) 壇上に並ぶ。教科書等の荷物は全部持って壇上の椅子に置く。
リーダーは初めと終わりに「姿勢, 礼」をかける。
- (2) 授業者が歌い始めの“A (ラ)”の音を与える。
- (3) 演奏が始まったら、聴き手は、聴きながら評価する。下の表に、良いと感じた項目を○で囲む。そのメモをもとに、“良い点”と“より向上するためのアドバイス”を発表する。(各グループに対して4人ぐらいつつ)

グループ	評価項目
A	声量/ピッチ (音高) /強弱/子音/ハーモニー/バランス/テンポ/全体のまとまり
B	声量/ピッチ (音高) /強弱/子音/ハーモニー/バランス/テンポ/全体のまとまり
C	声量/ピッチ (音高) /強弱/子音/ハーモニー/バランス/テンポ/全体のまとまり
D	声量/ピッチ (音高) /強弱/子音/ハーモニー/バランス/テンポ/全体のまとまり

- (4) 自分のグループについては、聞いた意見を参考に自己評価する。

* A, B, C, D各グループの演奏ごとに評価と意見交流を行う。

＜発表後の洗練の時間＞

発表後は時間がそれほどないため、相互評価をふまえて、前回と同じ場所に分かれて、演奏をより洗練させるための練習をする。話し合いよりも、歌う時間を多くとるようにしよう。

本時のまとめを確認し合って、各グループで学習終了となります。

これまでの練習の経過 (互いに練習経過を共有したうえで演奏を聴こう)

グループ	9月27日練習後の課題	10月11日の練習で工夫した点	10月11日の練習の成果
A	・パートのバランスをとる	アルト以外のパートの声量を調節し、アルトはおなかから声を出すようにした/パートごとに練習した	自信がついた/曲の構造や、何が課題なのかがわかった
B	・子音をたてる ・強弱をつける	子音や強弱に注意した/指揮をつけた	伸ばしの拍数を確認でき、出だしのタイミングが良くなった
C	・はっきりと歌う ・テンポをそろえる	特に“あ”にアクセントをつけた/1人聴き手になって、客観的な意見を聞いた/メトロノームを使った/してほしいことを5割増して伝えた/視線をそろえた	音量の差がついた (声が大きくなった)
D	・他のパートとの掛け合いを意識する	耳を傾けて周りの音を聴くようにした/男女の位置を変えてみた/区切って練習した/強弱をつけた	他のパートの動きがわかった/バランスが良くなった/縦の線がそろうようになった/最後の和音がきれいに合った

本時の学習を振り返って一言感想

()

実践上の留意点

1. 教材楽曲の選択

今回の授業で『混声合唱のためのア・カペラエチュード』を教材として選択した理由は、ピアノに頼ることなく互いの声を聴きあって歌う力を身につけさせたいと考えたからである。この曲集のなかの「光が」はポリフォニックな曲であり、「ゆきがとける」はホモフォニーである。各曲の指導で重視する点は、「光が」では、冒頭のユニゾン部分を声をそろえて歌い、カノンの部分は各声部が互いに呼応して歌うことであり、「ゆきがとける」では、言葉の響き（特に子音）やハーモニーや転調感を大切に歌うことである。曲調の異なるこの2曲は、生徒たちが楽しみながら互いに聴きあって歌うために適切な曲であると考えられる。

2. 合唱活動におけるリーダーの育成

この取り組みに入るまでに、日頃の合唱においてパートリーダーを育成することが肝要である。リーダーは互選で決める。基本的に生徒の自主性に任せているが、指導者は適宜助言・支援する。

3. グループ分け

各パートで（このクラスの場合は）4つに分かれて、ソプラノ、アルト、テノール、バスから数人ずつ集まって1つのグループを結成した。各パートで3つに分かれることは生徒たちに任せた。その際に留意させたことは、歌声の大きさには個人差があるから、各グループの声の大きさがほぼ均等になるようにすることと、自主的にグループ練習を進めるために、音楽的にもリーダーシップを発揮できそうな人を分散させることである。4つのパートが集まって1つのグループができたなら、リーダーとサブリーダーを決めさせた。

4. アクティブ・ラーニング

これまでにも意識して指導を行ってきたことではあるが、音楽活動のすべてにおいて、常に音楽的思考は行われるべきであり、そうでなければ音楽学習は成立しないと考えている。グループ活動を行うことで、各自がより責任をもって歌うための環境を指導者は提供する。練習方法も自分たちで考えさせた。グループ内でテンポが合わないときには、メトロノームを使うグループ、手拍子で合わせるグループ、リーダーの指揮に合わせるグループなどさまざまであった。また、毎時間の活動を振り返らせ、次時の課題を書かせることで意識付けをさせた。

5. 相互評価による高めあい

中間発表と本発表を行い、グループ相互で評価させた。各グループが前時に書いた課題にもとづいて、練習の成果が出ているか、グループの演奏の良いところはどこかを考えさせ、発表させた。

* 研究授業後の協議会では、参観者や指導助言者から、生徒の自主的な活動は評価していただいたが、「深い学び」の具体についてもっと明確に提示するとよいとの指摘があった。